

## 和英辞典だけをうのみにしない実務翻訳の現場

年も明け寒さ厳しいこの頃、皆様お元気でお過ごしのことと察します。

今回は、和英辞典の枠にとらわれない実務翻訳者のアプローチを紹介したいと思い、投稿することにいたしました。

これまでの19年近くにわたる英訳経験からいうと、ちまたの和英辞典からひろった訳語をあてはめた英訳は、ほとんどがネイティブ・チェックの段階ではねられています。そこで一例として「就航する」をどう表現したらいいのかということを経験に絞り込むことにいたします。

研究社大和英辞典によると、この訳として、「commission; service / ～する [船・航空機などが] go into commission [service]; be placed [put] in commission. / (航空会社が) ～線に就航する be placed on the ... line / ～を就航させる place ... in service; commission ... for service.」という定義があります。

しかし果たしてこの他にも訳し方はあるのではないかと私は思いました。当時(1995年頃) UA から送られてきた英文パンフレットを目を皿のようにしてチェックしてからメモったところ、これにあてはまるような以下の英文が見つかっております。

The first A-B flight takes off. / (主語) is scheduled to make its debut. / (主語) opens a (direct) route to ～・・・以下中略

またこの他にも、10数通り近い英訳法が見つかっています。こうして見ると、やはり既存の和英辞典には限界があるように感じられるとともに、実務翻訳の世界では和英辞典はまだまだ発展途上にあることを実感すると同時に、多分に翻訳者が工夫をこらす余地が残されているのだと自負しております。

そこで、このホームページの来訪者に既にプロになって数年目あるいはこれからプロを目指そうという方々がいると想定し、和英辞典の頼りすぎは禁物であると提案する次第です。私自身、いい英訳を目指すには英借文が一番だという考えは、いまだに変わりありません。英語は英米人の英語が一番そして日本語は日本人の日本語が一番だという思う故です。だからこそ、翻訳が今でも必要とされているのだと思うからです。

翻訳の世界はまだまだ発展途上。そんな訳で、既存の書籍のいたらぬ点を網羅すべく現役翻訳者による切磋琢磨が必要とされているのだと思います。

以上、実務翻訳という観点からの経験者のコメントとさせていただきます。

以上これにて、29回目終わり。